

漢字の「一字一音」に対する変則

——中国語についての基本概念——

江 英 居

- | | |
|----------|---------|
| 一、字音の作り方 | 四、異義異音字 |
| 二、漢字の読み方 | 五、変調字 |
| 三、同義異音字 | 六、結論 |

一、字音の作り方

中国においては歴代から累積して来た文字が、およそ五万字位に達している。しかし、日常生活に使われている漢字は、約五千字に過ぎない。⁽¹⁾ 古代の中国人は、その文字を作る時に、文字の読み方を、十分に考えたのである。その方法は、大抵次の通りである。

1. 人間の自然な声を模倣すること

例えば、斥、驅という漢字の意味は、人を追い出すことを指す。人は他人を追い出す時には、自然的に、口から chī か qū という声を出すのである。従って、斥の読み方は chī になり、驅の読み方は qū になる。

2. 動物の声を模倣すること

例えば、鴨という動物は、その口から出る声が、大抵 yā に似てるから、鴨を yā と称する。

3. 物の音を模倣すること

例えば、射箭という漢字の意味は、矢を発射することを指す、矢を発射すると、shè という音を引き起すから、射の読み方を shè という。

4. 物の特徴による読み方を作ること

漢字の「一字一音」に対する変則

ある漢字の読み方は、自然の声を模倣できず、或いは、模倣しなかったこともある。中国人はあるものの自体に存ずる特徴を考えた、その特徴による読み方を作る。例えば、土地の土を tǔ という読み方である。これは吐 (tǔ) の読み方から取り入れたものである。農牧時代に、土地の最大な特徴は「吐生万物」である。吐生という漢字は、生産することを意味する、従って、土の読み方はその特別な機能「吐生」の吐の読み方を取り入れた。

5. 「声符」を作ること

声符というものは、漢字の読み方を示すものであり、ちょうど日本語のかなの役割と同じである。最初に作られた声符は、のちに、この声符を使っている漢字から転化した漢字の読み方になる。例えば、青 qīng という漢字の読み方を一旦作ったら、青から転化した漢字清、蜻、鯖などの読み方は青と同じである。

中国における漢字の字音の変遷は、通説によって、次のような段階である。

1. 紀元前11世紀より紀元前3世紀までの時期（周・秦）は、韻書というものがまだ作られていなかったのので、字音についての「真相」は、あまり分らないが、今、一般に参考としている資料は段玉裁の六書音韻表と嚴可均の説文声類などがある。
2. 紀元前2世紀より紀元2世紀までの時期（西漢・東漢）は、字音の基準はまだ統一していなかった、漢字の読み方は、非常に変りやすいのである。このことは、漢代の人々によって作られた韻文を読むと判かる。
3. 紀元3世紀より6世紀までの時期（魏・晋・南北朝）は、韻書が使われ初めた時期で、字音は韻書に載せている読み方（反切）を取り入れている。⁽²⁾ この時期の韻書は、李登の声類、呂静の韻書、夏侯詠の韻略、陽休之の韻略、周思言の音韻、李季節の音譜、杜台郷の韻略などがあつた。⁽³⁾
4. 紀元7世紀より13世紀までの時期（隋・唐・宋）は、韻書作りの全盛期であり、南方と北方の読み方を含んでいる。その代表的なものは、陸法言等八氏共著した切韻である。
5. 14紀元世紀より19世紀までの時期（元・明・清）は、中国の北部の北音を中心として韻書が作られた、例えば、元・周德清の中原音韻と明代の洪武正韻

漢字の「一字一音」に対する変則

などがある。周徳清は約六千字の漢字を「北曲」の「押韻」によって十九類の韻類として分けて、中原音韻を作った。北曲は当時、実際生活上に使われている言葉により作られたものである。当時・中原・中州等北方官話の語音系統を代表するもので、中原音韻というものは、当時北方官話の語音系統を代表するものと思われる。

1913年、中華民国政府の教育部は、全国各地の代表者を招ねて、「読音統一会議」を開き、およそ6500の漢字の字音を検討し、「北音」を基準として、39個「注音字母」を制定した。この時期から、漢字の字音は、前述したような韻書時代から離れて、標音時代に入り込んだと言える。しかし、注音字母が公表された後、多くの人々は、これで記事・手紙を書き、同政府は漢字に不良影響を防ぐため、1930年、注音字母に「注音符號」という名称を改めて公表した。

北京は、五代（西暦907—960年）から明・清の時代まで、約千年の間、殆んど歴代の首都であり、全国の政治・文化の中心地になった。また、こうした長い時期の間、北方に、いろいろな戦争と「民族遷移」があった。北京語音（北京の地方弁）は、北方語音と互いに影響されていた。一方、全国で愛読される文学作品は、北京語音によって作られたものも多い。例えば、曹雪芹の紅樓夢、浦松齡の醒世姻縁、吳敬梓の儒林外史、李汝珍の鏡花縁、施耐庵の水滸伝、吳承恩の西遊記、羅貫中の三国演義、劉鶚の老殘遊記などの作品があった。さらに、北京語音の音声は、「清亮」（声が證み話の筋が通っている）、「高揚」（声が高い）、「四声」と「兒化韻」の変化することにより、言葉の意味が分かりやすい、こうした長所を、中華民国政府教育部は考えに入れ、北京語音を中国の標準語（国語）として決めて、一般に、これを「中国語」と称された。1953年に、中華人民共和国は、前述した注音符號がただ一種類の「記音符號」で、「音素字母」ではないから、「語音の構造」及び方言と標準語との「対応關係」に対する説明は難しいと指摘した。1958年、注音符號が廃止され、ラテン字母（ローマ字）を字音の「声母」と「韻母」として使われた。

ニ、漢字の読み方

中国語の読み方は、次の例のような組み立て式である。

漢字の「一字一音」に対する変則

一つの音節 一つの音節 一つの音節 一つの音節 四つの音節
愛 (ài) + 国 (g+uǒ) + 男 (n+án) + 児 (ér) → 愛国男児
音素 音素+音素 音素+音素 音素

愛国男児は四つの漢字から組み立てられたのであり、その読み方は四つの音節になる。つまり、一つの漢字は一つの音節である。しかし、一つの音節は、一つの音素が二つの音素から構成されるのである。現在中国語の音素は、10個の母音（元音）と32個の子音（輔音）があり、こうした音素が組み立て来た「基本音節」は、大抵400個あまりがある。この基本音節は、四声の「声調」（アクセント）の変化を加えると、1200個あまりの音節になる。こうした主要な母音と韻尾を組み合わせて、いろいろな韻母を表わすことができる。

中国語の読み方には、一つの漢字に一つの音節がある、即ち「単音節」であり、これは、中国語の読み方の特徴である。例えば、「軟」という漢字の読み方は、音素の声母 r と韻母 uǎn を合わせて、一つの音節「ヅワアン」になる。しかし、この「軟」は、日本語の訓で読むと、「ヤワラカイ」であり、五つの音節「ya wa la ka yi」になる。また、「免」の中国語の読み方は、声母 m と韻母 iǎn を合わせて、一つの音節「メン」になるが、日本語の訓読みは、「マヌカレル」になって、五つの音節「ma nu ka lei lu」の構造である。このゆえに、中国人は、漢字を日本語で訓読みすると、仲々難しいと感じたが、一方、漢字の日本語の音読みは、多少おぼえやすいと感じる。これは、漢字を日本語で音読みにすると、その音節数が少ないからである。例えば、「軟」は日本語で音読みすると nan である。即ち、声母 n と韻母 an を合わせて、一つの音節と考えられる。また、漢字の「免」は、日本語の音読みすると、mian になる。これは、声母 m と韻母 ian を合わせて、一つの音節になったが。さらに、免は日本語で音読みすると、mian であるが、これは中国語の読み方 miǎn と十分近いのである。その区別点は、ただ、声調だけである。つまり、免は日本語の音読みは、「陰平声」miǎn のであり、中国語の読み方は「上声」の miǎn である。従って、中国人は、漢字を日本語の音読みは、訓読みより学びやすいし、覚えやすい。一方、日本人は、漢字の読み方を、訓読と音読と両方に使うので、漢字の中国語の読み方は（声調を除く）、あまり難しくないとと言えるのである。⁽⁴⁾

漢字の「一字一音」に対する変則

本稿でのちに述べる「字音の変則」を除いて、普通に漢字の中国語の読み方は、「一つの漢字に一つの字音」で読むしかない。例えば、「下」という漢字は、その読み方は xià で一種類しかない。しかし、これに対して日本語の読み方は、「か、げ、おりる、おろす、おんり、くださる、くださんす、くだす、くだる、さがる、さげる、した、しも、もと、ください」など十数種類の字音があるが、さらに、熟語の読み方は、音読か訓読かはっきり線引きしない、ある時には音読であり、例えば、下等（か、とう）で、ある時には訓読であり、例えば、下調（した しらべ）で、ある時には湯桶読であり、例えば、下女中（しも じよう ちゆう）で、ある時には重箱読であり、例えば、下手物（げ て もの）である。さらに、ある時には、特別な読み方もある。例えば、下手（へ た）である。これに対して「下」の中国語の読み方は一律 xià になる。

日本語の複雑な読み方に対して中国の読み方は、より簡単とも言えるのである。

中国には、「一字多音」という字音の変則も例外的に存在している。これは、「同義異音字」、「異義異音字」と「変調字」である。

三、同義異音字

同義異音字とは、一つの漢字に二つの読み方で、両方とも同じ意味を示めしているもので、その代表的なものは、「語音」と「読音」との読み方である。

語音とは、「説話音」、「白話音」又は「話音」とも称される。これは、「白話文」（口語体）を読む時、或いは会話の時に使われる字音である。これに対して、読音とは、「読書音」、「文言音」又は「字音」とも称される。これは、「文言文」（文語体）或いは単独の漢字を読む時に使われる字音である。

1. 白、白の語音は bái であり、例えば、白 bái 云（雲）蒼（蒼）狗・白 bià 头（頭）偕老である。一方、その読音は bó であり、例えば、黄尘（塵）足今古、白 bó 骨乱蓬高（王昌齡・塞下曲）、漢下白 bó 登道、胡窺青海湾（李白・关山青）などがある。

2. 百・百の語音は bǎi であり、例えば、百 bǎi 花齐（齊）放、百 bǎi 家争鸣（鳴）であるが、一方、その読音は bó であり、例えば、一身转（轉）战（戦）三千里、一剑（劍）曾当百 bó 万师（師）（王维・老将行）、烹羊宰牛且

为 (為) 乐 (樂), 会須一飲 (飲) 三百 bó 杯 (李白・将进酒) などがある。

3. 车 (車), 車の語音は chē であり, 例えば, 车 (車) chē 水马 (馬) 龙 (龍), 车 chē 载斗量であるが, その読音は jū であり, 例えば, 若非巾柴车 jū, 应 (應) 是釣 (釣) 秋水 (邱为尋西山隱者不遇), 闻 (聞) 道王门犹 (猶) 被遮, 应将生命逐輕车 jū (李颀・古从軍行) などがある。

4. 北, 北の語音は bái であり, 例えば, 北 bái 京大学であるが, その読音は bó であり, 例えば, 北 bó 山白雪里(裏), 隱者自怡悦 (孟浩然・秋登蘭山寄張五) がある。

5. 薄, 薄の語音は báo であり, 例えば, 薄 báo 餅 (餅) ル (兒), 薄 báo 沙吊ルなどがある。その読音は bo であり, 例えば, 十年一覚楊楊州夢 (夢), 贏得青楼薄 bó 倖名 (杜牧・遣懷)。桂魄初生秋露微・輕罗 (羅) 已薄 bó 未更衣 (王維・秋夜曲) などがある。

一つの漢字が, なぜ語音と読音になったか, その原因は, はっきり分らないが, 長い歴史の流れや, 「音変因素」があるとも言われた。これは, 一つの漢字は, その字音の韻母の変化から, 二つの読み方 (語音と読音) になったのである。例えば, 韻母の o, e は ai, ei, ao に変化し, ai, ei の韻母は ao, ou と入り混じって, yi の韻母は ai, ei と入り混じることである。趙元任氏は, 語音と読音になる漢字は, 殆んど古代の「収塞音尾一K」の「入声字」であると言われるが, 実際, 一般に入声は, p, t, k の要素であって o, e は関係あるか定かでない。通説によると, 語音の字音は, 漢・魏の時代までの先祖代々から伝えられたものである。一方, 読音は, 宋・明清時代以来, 韻書に載せている読み方 (反切) を取り入れたものである。

次に, 「又読」というものも「同義異音字」の一種類である。例えば, 「盾」という漢字は, shǔn と dùn の読み方があり, 「矛盾」の読み方は máo shǔn また máo dùn と読める。しかし, 「銀盾」 yín dùn か「盾牌」 dùn pái などの読み方は, 盾は dùn と読み, shǔn とは読まない。また, 漢字の「滑」は, huá と gǔ の読み方があり, 「滑稽」の読み方は huá jī と gǔ jī があるが, しかし「滑冰」 huá bīng か「滑橋」 huá qiáo などの読み方は, 滑は huá と読み gǔ とは読まない。その読み方の区別のルールはないので, 習慣

的なものであると思われる。

四、異義異音字

人類社会は文化の発展により、文字によって、表現するものも段々増えて来たので、現実社会に使われている漢字の字形や字音も足りない局面になった。従って、中国人は、すでに出来た漢字は、その意味を転化して、その読み方も変える。これは「異義異音字」または「多音字」と呼ばれるが、しかし、前述した「同義異音字」も多音字の一種類であると思われる。いわゆる「破音字」は、異義異音字の主なものである。一つの漢字が異義異音になる原因は、次のように指摘されている。

1. 「同字音」が「仮借」されるから、異義異音字になる。例えば、「被」と「披」は「皮」から字音を貰った、二つの字の読み方は、同じと言える。「被髮左衽」の被は披（分散する）を意味するから、被は bèi とは読まなくて、披 pi の字音を取る。
2. 二つの文字は同じ形から、異音になる。例えば、昔の「奶」nǎi という漢字は、また一つの書き方「妳」である。従って、妳の読み方は、本来の nǐ と nǎi になる。
3. 外来語の読み方が変化した。例えば、漢代匈奴王「冒頓」mào dún は、現代の読み方は mào dùn になる。
4. 標準中国語は同じ漢字の地方弁を取り入れる。例えば、「圳」の読み方は、康熙字典によると chóu であるが、福建省南部地区では、圳の読み方は zùn と jùn であり、結局圳は三つの読み方になる。
5. 反切法で使う漢字の読み方が変わったために、字音も変更された。

破音字とは、通常の発音以外の音をもつ文字、その意義の変化、或いは文言文、口語体の文章の差によって生じる字音ともいわれているが、しかし、文言文か口語体かの差により生じる字音は、前述した読音と語音の形成原因である。破音字とは、文字の本義をもとにして意義を引きのばし、その「詞類」も変って、そしてその読み方も変化してしまう。

1. 乐 (樂)。楽は象形字であり、その字の本義は、楽器 yuè qì を意味する。字の詞類は名詞であり、読み方は yuè である。しかし、この字の本義をもと

漢字の「一字一音」に対する変則

にして、意義を変えて、楽しいことを意味する。その読み方は *lè* になり、例えば、樂不思蜀 (*lèbù sī shǔ*)。樂はこの時に形容詞になる。しかし、樂は動詞になると、好む、愛好するを意味し、この場合の読み方は *yào* になり、例えば、仁者樂山，知者樂水 (*rén zhě yào shān, zhī shé yào shuǐ*) 論語雍也篇。樂はまた一つの読み方 *lào* があり、例えば、蓮花樂 (*lián huā lào*) (曲の名、多く乞食の類が唱う) などがある。

2. 从 (従)，從の本義は動詞で、「……に従う，から，……により」などを意味する。その読み方は *cóng* である。例えば、從一而終 *cóng yī ér zhōng* がある。その本義をもとにして意義を引きのばすと、名詞になり、付属するものを意味する、その字音は *zòng* になる。例えば、從犯 (*zòng fàn*) がある。從は副詞になると、落着きか余裕があるを意味する。読み方は *cōng* になる。例えば、從容無為 (*cōng róng wú wéi*) (莊子・在宥篇)。從は名詞の「縦」*zōng* と同義に用いられた、その読み方は *zōng* になる。例えば、縦横学 *zōng héng xué* がある。

3. 参・參は動詞で、加入するかまみえるなどを意味する。その字音は *cān* である。例えば、参政 *cānzhèng* がある。参は名詞になると、その字音は *shēn* になる。例えば、高麗人参 *gāo lí rénshēn*，参商二星 *shēn shāng èrxīng* などがある。参は形容詞になると、揃っていない・並び続くさまを意味する。その字音は *cēn* になる。例えば、瓦縫参差 *wǎfèn cēnci* (杜牧・阿房宮賦)。さらに、参は数詞の三と同義に用いられる。その字音は三 *sān* と同じである。例えば、日参省乎己 *rìsānxǐng hūjǐ* (荀子・勸学篇)。

五・変調字

中国語には、字音のアクセントの規則があり、これは、一般に、「声調」(声律) 或いは「四声」と呼ばれ、周徳清の中原音韻によると、唐宋の時代までの声調は、平声、上声、去声、入声など四声があったが、その後、北方口語が発達したから、入声がなくなり、平声は陰平声と陽平声に分かれた。⁽⁵⁾ また古音の「清声母」の字は、陽平声の字に変化し、「浊声母」の字は陰平声の字になってから現在の四声になる。変調字とは、一つの漢字が他の漢字と一つの熟語になる時は、その文字の本義と発音が変わらず、ただ、そのアクセントが変わるも

のである。その種類は、次の通りである。⁽⁶⁾

(a)・上声の変調

陰平声、陽平声と去声の「音長」は、いずれも四つの拍子であるが、上声の「音長」は、五つの拍子になり、その発音は、よりエネルギーを求めるために、上声の字は、その後についている漢字の声調により変化する。

(一)・上声字は、陰平声、陽平声、去声、轻声などの漢字の前に置かれると、「半上声字」になる。⁽⁷⁾ 法家 fǎjiā→fǎjiā, 警察 jǐng chá→jǐng chá, 宇宙 yǔzhòu→yǔzhòu, 椅子 yǐzi→yǐzi。

(二)・二つの上声字がつづいた場合には、後の上声字は変わらず、しかし、前の上声字は陽平声字になる。理想 líxiǎng→líxiǎng。

(三)・二つの上声字がつづいた時に、もし後の字音が轻声に変わった場合には、前の上声字は陽平声字になる。老虎 lǎohǔ→láohu。

(四)・三つの上声字がつづいた場合には、二つの読み方がある。(1)・第一と第二の上声字は陽平声字になり、第三の上声字は変わらない。例えば、处理好 chǔlǐhǎo→chúlíhǎo である。その理由は、第一と第二の上声字は、第三の上声字と組み合わせない場合でも一つの熟語になる。しかし、第二の上声字と第三の上声字は、もし第一の上声字を離せば、一つの熟語になれないといわれる。(2)・第一の上声字は半上声字になり、第二の上声字は陽平声字になり、第三の上声字は変わらない。例えば、拿粉笔(筆) nǎfǎnbǐ→náfánbǐ である。その理由は、第二と第三の上声字は、第一の上声字を離しても、一つの熟語になれるが、しかし、第一と第二の上声字は、第三の上声字を離せば、一つの熟語になれないのであるといわれる。(五)・四つかそれ以上の上声字がつづいた場合には、字音の声調の変化は、大抵人の話しのスピードにより変る。例えば、豈有此理 qǐyǒu cǐlǐ をゆっくりで読むと、陽平声、半上声陽平声、半上声の順になり、gíyōucǐlí。しかし、速く読むと、gíyōucǐlí。陽平声、陰平声、陰平声、上声などの順になる。四つかそれ以上の上声字がつづいた時には、非常に読めにくいから、そのスピードは、殆んど自分で自然に調整するのである。

(b)・一・七・八・不の変調

韻書の「反切」によると、一は「衣悉切」で、七は「砌一切」で、八は「ト

漢字の「一字一音」に対する変則

滑切」で、不は「夫物切」であり、この四つの字の声調は、いずれももと入声字であるが、しかし、前述した北京語は入声の字音を使っていないので、北京語を基準とする中国語は勿論入声の字音も用いられないことになる。従って、中国語は、原則として、「一、七、八」などの字の声調は陰平声に、「不」の声調は去声に帰属させる。しかし、本当の陰平声字、去声字ではないから、声調の美しさを求めるために、いずれもそれぞれの後の漢字の声調により変化されるのである。

(一)・一の声調の変化

一が単読、数字連用、語尾になっている場合には、陰平声になる。六十一 (liùshíyī)。一が去声字の前にある場合は、陽平声になる、一夜 (yí yè)。一が陰平声字、陽平声字、上声字など字の前にある場合には、去声字になる。一天 (yì tiān)、一年 (yì nián)、一本 (yì běn)。

(二)・七の声調の変化

七が単読、数字連用、語尾になっている場合には、陰平声になる、五十七 (wǔshíqī)。七が陰平声字、陽平声字、上声字の前にある場合には、陰平声になる、七只 (qī zhī)、七条 (qī tiáo)、七种 (qī zhǒng)。七が去声字の前にある場合には、陽平声字になる、七歳 (qī suì)。

(三)・八の声調の変化

八が単読、数字連用、語尾になっている場合には、陰平声になる。三十八 (sānshíbā)。八が陰平声字、陽平声字、上声字の前にある場合は、陰平声になる、八张 (bā zhāng)、八头 (bā tóu)、八匹 (bā pǐ)。八が去声字の前にある場合は、陽平声になる。八步 (bā bù)。

(四)・不の声調の変化

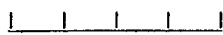
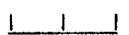



不が単読、陰平声字、陽平声字、上声字の前にある場合は、去声になる。不知 (bù zhī)、不覺 (bù jué)、不管 (bùguǎn)。不が去声字の前にある場合は、陽平声になる。不問 (bú wèn)。

(c)・轻 (輕) 声

軽声とは、漢字の本来の声調を失って、軽く短く発音される字声をいう。中国語の熟語の読み方は、一旦軽声に変わっても、原則としてその熟語の意義は変

漢字の「一字一音」に対する変則

っていない。例えば、心腹の読み方は xinfù と xinfu があり、両方とも同じ意味（心の奥底）であるが、しかし、xinfù の読み方は、アクセントの自然的美しさを表わしていないのである。一方、ある中国語の熟語の読み方は、一旦軽声になると、その意味を例外に変わってしまう。例えば、老子は、lǎozǐ (láozǐ) に読むと、中国の「道家」の創立者李耳氏を指すが、lǎozǐ に読むと、父親を意味する。管子は、guǎnzǐ (guánzǐ) に読むと、春秋時代の名相管仲氏を指すが、guǎnzi に読むと、中空の柱・パイプを意味する。しかし、こうした例外的な軽声字は少ない。軽声の「短く発音」の基準は、大抵四声の声長（音長）の半分しかない。また、「軽く発音」とは、字音の「調値」（音声の高低）の変化することを指すが、この軽声の字の調値は、前にある字の音声によって変化する。次の図は、軽声の字の調値と声長を表すものである。

- 5 
- 4  yǐ zi
椅子（軽声字は上声字の後に置く）。
- 3  gē ge
哥哥（軽声字は陰平声字の後に置く）。
- 2  shí tou
石頭（軽声字は陽平声字の後に置く）。
- 1  mèi mei
妹妹（軽声字は去声字の後に置く）。

軽声字の種類は、次の通りである。

(一)・文法上の軽声

(1)・助詞（語気助詞・時態助詞）の軽声

好的 (hǎode), 来了 (lǎile), 站着 (zhàn zhe)。

(2)・詞尾の軽声

椅子 (yǐ zi), 尾巴 (wěi ba)。

(3)・方位詞の軽声

里面 (lǐmian), 桌子上 (zhuōzishang)。

(4)・方向補語の軽声

放下 (fàng xia), 进来 (jìn lai)。

(5)・重複式動詞の軽声

看看 (Kàn kan), 笑笑 (xiào xiao)。

(6)・重複式動詞の中の副詞の轻声

摸一摸 (mōyi mō), 好不好 (hào bu hǎo)。

(二)・「語彙」の轻声

(1)・古い時代の外来語

菩薩 (pǔ sa), 葡萄 (pǔ tao)。

(2)・重複形式の名詞

哥哥 (gē ge), 星星 (xīng xing)。

(3)・並列構造からなるいくつかの語

東西 (dōng xi), 先生 (xiān sheng)。

(d)・ル化韻 (兒化韻)

中国語の標準語として使われる北京語には、東北語、四川語、南京語、杭州語などの方言と同じ、音節の末尾に、「接尾辞ル」の「卷舌音」(Retroflexion)が用いられる習慣があり、本来は卷舌の韻母を含まない音節は、この卷舌音により、音節末尾の読み方は変化し、「卷舌韻」(Retrotlex ending)になる。これは兒化韻と呼ばれる。

兒化韻についての発音の変化規則は、元の韻母を基準として変化される。即ち、元の韻母は卷舌しやすい場合には、その韻母は変わらないので、ただ、rの韻母を加えるが、しかし、元の韻母が卷舌しにくい場合には、その変化のルールは、要するに次の通りである。

(一)・韻尾が -ai, -ei, -an, -en で終わっている韻母は、韻尾の音, i, n を取り去ってから r 韻をつける。一块ル (yíkuàir→yíkuàr), 酒味ル (jiǔwèir→jiǔwèr), 一点ル (yīdiǎnr→yīdiǎr), 課本ル (kèběnr→kèběr)。

(二)・韻尾が -i, -ü で終わっている韻母は、韻尾に e を加えてから、r をつける。没事ル (méishìr→méishìer), 没趣ル (méiqùr→méiqùer)。

(三)・韻尾が -in, -ün で終わっている韻母は、韻尾の n 音を取り去って、e を加え、そして韻 r をつける。小心ル (xiǎoxīnr→xiǎoxīer), 羊群ル (yángqún r→yángqúer)。

(四)・韻尾が -ng で終わっている韻母は -ng が脱落し、主母音が「鼻音化」するから、r 韻をつける。气窗ル (qìchuāngr→qìchuār)。

(五)・結論

人口約十億の中国で97%前後の人は漢民族であるといわれた、漢民族は漢語を使っている。しかし、漢語の中には、北方官話、西南官話、下江官話、呉語、閩語、贛語、客家話、粵語、湘語、徽州語などいろいろな方言がある。中国語とは、北方官話の代表的なもの一北京語である。一般に、中国語は漢語を意味するが、実際に、中国語というものは、漢語の中にある北京語を指すことであることが判らなければならない。しかし、前に述べたように、中国の数千年の歴史の流れに、人間の往来・戦争、生活基盤の移動、国の政治文化中心の変動などの原因により、方言が互いに入り混じることは避けられないのである。また、前述したように、漢字の字音のつくりについての考え方によると、漢字の「一字一音」という原則は、厳密には立てられないのである。従って、中国語の「標準語音」を学ぶとき、これら「異音字」と「変調字」についての変化のルールを十分注意しなければならないのである。

注釈

(1)・台湾の国立編訳館は、新聞、小学校のテキスト、児童の作文・コマチャールフォト・大衆読物などを調べたが、のべ753940字のうちに4864個の漢字が使われている。

(2)・古代の中国には、音標文字がないので、一つの漢字に、他の二つの漢字を合わせて、一つの音節の形で発音する。これは「反切法」である。例えば、「蘭」は「落」と「干」の切である。

(3)・あらゆる漢字を韻の異同によって分類し、これを一定の順序に並べたものを「韻書」という。韻書は「詩文」の「押韻」の標準を示すことを目的としたものであり、李登の韻書は、字を音別に区別し、これに訓詁を付けたもののようである。

(4)・日本に漢字の唐宋音の特色は、今日の中国語にとってもよく似ている。その原因は、中国語は北京語であり、北京語は宋元時代の中原の共通話であり、鎌倉・室町時代に、日本が中国から取り入れた漢字の字音（唐宋音）は、北京の地方弁である。

(5)・斉・梁のころ（5世紀）「悉曇学」（梵字・梵語の綴り方や音韻の法則に関

漢字の「一字一音」に対する変則

する学問)の知識も手伝って、漢語に備わる声調への認識が高り、その結果「平・上・去・入」の四声に統撰するといわゆる「四声説」があった、その主唱者は梁の沈約氏であるといわれている。

(6)・清音というものは、発音する時に、声帯を振動さない子音である (b p f d t g k h j q x zh ch sh z c s)。濁 (濁) 音とは、発音する時に、声帯を振動させる子音である (m n ng l r)。

(7)・半上声とは、上声の尻上がりの部分を省略して読んだ上声のことを指す、その記号は「L」も使っている。

参考文献

- (一)・林尹・中国声韻学通論・世界書局・1971年。
- (二)・陳新雄・中原音韻概要・学海出版社。1979年。
- (三)・中沢希男・漢字，漢語研究，教育出版・年1978。
- (四)・董同龢・漢語音韻学・永裕印刷廠・1970年。
- (五)・徐世榮・普通話語音知識，文字改革出版社・1980年。
- (六)・華中師範学院中文系現代漢語教研室編・現代漢語音知識，湖北人民出版社。1978年。
- (七)・莊海樹・松本丁俊。現代中国語・時潮社，1981年。
- (八)・藤堂明保・漢語と日本語・秀英出版社。1981年。
- (九)・王天昌・漢語語音学研究・国語日報出版部・1980年。
- (十)・趙元任・語言問題・台湾商務印刷館・1960年。
- (十一)・蔡佳君・国語発音和語法，学生書局・1981年。
- (十二)・王天昌・読音語音的習慣問題・1981年7月・中日中国語言教学研討会講義。